

# ヌタウナギ資源調査

(第2県土水産資源調査)

由木雄一・石田健次・安木茂

## 1. 研究目的

本県沿岸に分布するヌタウナギの漁獲実態・資源状況、生態等を明らかにし、ヌタウナギ筒(籠)漁業の採算性、長期的な事業展望および資源管理手法について検討する。これにより、本資源の有効利用と漁業経営の安定を図る。

## 2. 研究方法

### (1) 調査船調査・生物調査

浜田沖から温泉津沖にかけての水深70～130mにおいて、試験船「島根丸」および「明風」により、延べ9回のアナゴ筒の試験操業を行った。漁獲物は筒ごとに、魚種別漁獲尾数の計数と記録を行い、ヌタウナギは実験室で全長、肛門前長、体重、雌雄、生殖腺重量、卵径、卵数等の精密測定を実施した。

### (2) 聞き取り調査・漁獲統計調査

石見海区においてヌタウナギの操業実績のある漁業者から、筒漁業の操業実態(漁具・漁法・漁場など)に関する聞き取りを行った。また、各漁協の水揚報告書からヌタウナギの漁獲量と水揚金額について整理した。

## 3. 研究結果

### (1) 分布・生態

本種は季節的な深浅移動を行い、夏期の6～9月は水深70～130mに分布し、その他の時期はそれより岸寄りに分布する。産卵期は4～9月でその盛期は夏期である。また、雌は全長33cm前後で産卵に加入する。1回の産卵数は12～56個(平均31個)と非常に少ない。

### (2) 漁業の経緯

島根県で本種を対象にした漁業を最初に始めたのは益田市漁協で昭和62年のことである。その後、石見地区を中心に各漁協で行われている。初期は主に革製品の材料のため鮮魚として扱われていたが、最近は食用が中心となったため活魚で出荷されており、価格は600円/kg程度である。

### (3) 漁獲量・資源状況

本県で漁獲されるヌタウナギは全て韓国に輸出されるため、水揚げは韓国の需用に左右され、漁獲量は20～50トン/年と変動が大きい。近年は漁獲努力量が増加したため漁獲量は増加傾向にある。浜田沖漁場における昭和58年調査<sup>1)</sup>時と今年度の調査を比較した結果、現在は以前に比べ資源状態が50～60%になっていると推定された。

## 4. 研究成果

- 調査結果は島根県漁業調整会議および石見地区漁協組合長会議において、本種の資源管理指針作成のための基礎資料として利用された。
- 調査結果の一部を月刊海洋「マアナゴの資源生態と漁業」に記載した。

## 5. 文献

- 1) 高橋伊武・石田健次：島根県水産試験場事業報告書(昭和58年度)、57-66(1983)。